

シンガポールの格安航空会社（LCC）スクートは19日、同国と札幌を結ぶ路線を10月に就航すると発表した。香港系LCCも7月、香港―高松線を設ける。日本のLCCが成田や関西国際空港から国際線を広げているのに対しアジア勢は地方を軸にシェアを固める。拡大する地方の訪日客需要の獲得で日本勢は先行を許す可能性がある。

「広い土地、美しい景色、おいしい食がそろった北海道はシンガポール人に人気。北海道が近くなる」。19日、北海道庁で記者会見したスクートのキャンベル・ウィルソン最高経営責任者（CEO）

LCC 訪日客争奪戦

シンガポール系が札幌線、香港系は高松

は新路線への自信を見せた。シンガポールと新千歳空港を台北経由で週3往復し、標準運賃は片道でエコノミークラスが税別1万3900〜4万9900円。

運賃を大手の3〜7割に抑えたLCCの国際線誘致に北海道は力を入れてきた。景気の足踏み感が続くなか訪日客は活性化に欠かせないからだ。それに応えたのがアジア勢。スクートには2013年から就航を要請し、4年越しの悲願達成だ。高橋はるみ知事は「シンガポールは東南アジアの

日本勢、地方で先行す

地方都市から飛ぶLCCの主な国際路線



中心。近隣からも来道者が増える」と期待する。「15年度は増加ペースが14年度の来道外国人観客は13年度比34%増の道）。新千歳へはマレ

ビジネス TODAY

シア、韓国、中国からもLCCが乗り入れ、14年度の国際線のLCC旅客数は22万9千人と13年度から3倍近くに増えた。北海道だけではなく、香港エクスプレス航空は7月に高松―香港線を設ける。四国と香港を結ぶ定期路線は初めて。台湾のVエアは3月、台北と茨城を結んだ。韓国ティエーウェイ航空は5月に大分―ソウル線を週2便から6便にする。日本の地方にアジアのLCC路線を軸にアジア路線を増やが張り巡らされていく。LCCの日本でのシェアは高まっている。国土交通省の調査では日本発着の国際線に占めるLCCの旅客シェアは12年の4・3%から14年には7・5%になった。

日本のLCCも訪日客需要が拡大するアジア路線がけん引役となり、収益は改善している。ANAホールディングス傘下のパニラ・エアは15年度に初の単年黒字化を達成したもよう。日本航空が出資するジェットスター・ジャパンも17年6月期の黒字化が見えてきた。ただ、日本勢は安定需要が見込める成田、関西（比奈田悠佑、石橋茉莉）

政府は訪日観光客を20年に現在の2倍の年間4000万人に増やす目標で、今後は大都市だけでなく、地方を目指す訪日客が増える見通し。運輸政策研究機構の橋本安男客員研究員は「日本の地方都市と海外をつなぐ路線をめぐり今後は国内外のLCCがぶつかる」とみる。日本勢も手をこまぬいている余裕はない。